


「科学哲学」 概論

～「テツガクって何？」と思ったあなたに贈るミニ講義～





かつては「科学」も「哲学」もひと
とつであった！？



時代	世界の中心	
～中世	神	ニュートン (～1727)
近代以降	人間 (理性)	

1840年頃「scientist」
という言葉が登場

ニュートンは何者だったのか？

- ニュートンは「哲学者」（愛知者）であった。
- 「愛知者」＝「知を追い求める者」の意味。
- ニュートンは現代でいう「物理学」も研究。
- 神が創造した世界の仕組みを理解するための研究。
→神学との強い結びつき
- 中世まではあらゆる知的活動は神学をベースとしてなされていた。

「哲学」って何？

- 人間が行う知的探究活動
- 「哲学」（形而上学）の基本的態度
 - 「～とは何であるか？」を問い続ける
 - 物事の本質を追い求める

「科学哲学」とは？

科学的探究に際して必要となる
哲学的態度

近代以降、人は「より良く」生きられているか？

○近代化の目的

→理性の力、科学の力で世界の仕組みを明らかにし、
合理化、数値化、普遍化して人間の幸福量を増大

○近代の弊害

→環境問題、戦争、核開発、格差社会など

【議論してみよう】

「発展途上国への古着の寄付」の是非

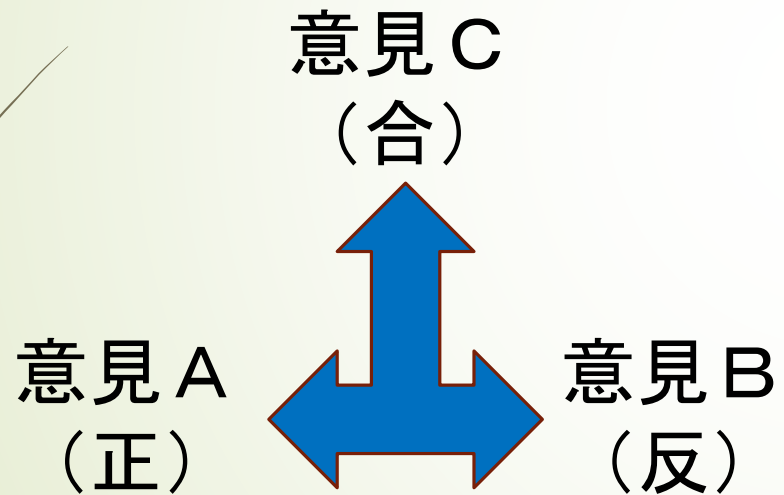
現代社会を生き抜くために

- 現代の諸課題は複雑な様相を呈していることの自覚
 - 科学的専門知＋人文・社会学的知が必要
- 多様性の時代に必要な知的姿勢への理解
 - 現代社会は、多様な意見を持つ人間が生活し、常に摩擦が起きる場所
 - 摩擦に耐えながら議論し、共通理解を得る
 - 「反知性的」でないか、自らの立ち位置の再確認

「科学」＋「科学哲学」を通して、人間の幸福量の増大（＝Well-being）を目指す

おまけ①

◆ 議論の一方法（ヘーゲル「弁証法」的手法）



互いに矛盾や対立を含む「意見 A」と「意見 B」を議論し、双方の意義を認めつつ、より高次の「意見 C」を導き出す方法

おまけ②

◆頭の体操「防火訓練のパラドクス」

先生 : 「来週の月曜日から金曜日の中で、防火訓練を行います。いつ行われるかは、当日にならないと分かりません。」

生徒A : 「実施日が分からないなんて不安だな。」

生徒B : 「大丈夫。防火訓練はできないよ。」

さて、生徒Bは、なぜこのようなことを言ったのでしょうか？頭を柔らかくして考えてみましょう。